

基礎工学研究科の果たすべき役割



巻頭言

戸部 義人*

The Role of Graduate School of Engineering Science

Key Words : Graduate School of Engineering Science,
Interdisciplinary Research and Education

20世紀の後半から始まった主として自然科学分野における知識の爆発的な増加は、従来の学問分野を無意味なものとし、新たな学術の体系を生むとともに社会にも大きな変革をもたらした。期せずして行われた国立大学法人化はこのような変革と無関係ではなかったように思われる。法人化後、大学やその部局の教育研究目標を明確にし、独自性を発揮することがますます強く求められている。一方、教育再生会議では大学院改革を重要課題の一つと捕らえ、従来の学部・研究科組織の枠組み撤廃や修業年限の改変、学生の流動性確保策、グローバル化推進策などが次々と打ち出され、大学は再び大きく揺れ動くとしている。このような背景のもとで、理、工と基礎工という全国で唯一の理工系3研究科体制をもつ大阪大学において、基礎工学研究科の果たすべき役割は何か、その意味を考えてみたい。

大阪大学基礎工学研究科は、創設以来「科学と技術の融合による科学技術の根本的な開発」をその基本理念としてきた。しかし、時代の要請にしたがい、理学と工学の間の学際領域だけでなく、人文社会系まで含めたより幅広い学際領域にまで研究領域を拡張するため、平成15年に改組を行った。具体的には、「物理と化学の融合」、「機械科学と生物工学の融合」、「文理融合」をキーワードとする3専攻に再

編し、新しい科学技術や新学問領域を創出するとともに、専門能力と幅広い素養に加えて鋭い時代感覚と国際感覚をもつ人材を養成することが、基礎工学研究科の果たすべき役割と位置づけた。さらに、専攻の再編だけでなく、一步も二歩も先を見越した学際領域研究を生み育てる仕組みとして「未来研究ラボシステム」という専攻横断型の研究教育組織を設けた。ここから、「基礎工らしい」といわれるようなユニークな研究の芽が出て大きく育つことを期待している。

一方、研究科内にとどまることなく全学的な部局横断型研究教育組織の核となって時代の要請に応える学際領域を開拓することも、大阪大学における基礎工学研究科の重要な役割だと考えている。実際、部局横断型教育研究センターやバーチャルな研究組織の立ち上げやその運営に対する主体的な取り組みに始まり、2007年度グローバルCOEプログラムに採択された臨床医工学融合研究教育センターの「医・工・情報学融合による予測医学基盤創成」事業（代表：野村泰伸 基礎工学研究科教授；生産と技術、60（1）、110（2008）参照）など、目に見える形で成果が現れつつある。このような部局間横断型組織の活動や研究科間連携は今後ますます活発になると考えられ、基礎工学研究科の果たすべき役割が大きくなるだろう。編集参画部局に医学系研究科に続いて歯学研究科が加わり、購読範囲が広がるだけでなくその内容も学際的になりつつある「生産と技術」誌が、そのような活動に対するメディエーターのひとつとして機能することを期待したい。



*Yoshito TOBE

1951年10月生

大阪大学大学院 工学研究科 石油化学
専攻 博士後期課程修了（1979年）現在、大阪大学大学院 基礎工学研究科
長、基礎工学部長、物質創成専攻新物質
創製講座教授、工学博士、構造有機化学

TEL : 06-6850-6225

FAX : 06-6850-6229

E-mail : tobe@chem.es.osaka-u.ac.jp